# 日本列島後期旧石器文化の起源と成立に関する試論

国武貞克

## Ⅰ　はじめに

日本列島における石刃石器群の起源をもとめて列島最古の石刃石器群を長野県香坂山遺跡において検出し、その発掘調査成果（国武編2021）に基づきその石器組成と技術組成を検討した結果、日本列島最古の石刃石器群の起源がユーラシアIUP石器群に求められることが判明した（国武2021、国武他2021a）。これとは別に、日本列島の後期旧石器時代は列島の中期以来の伝統をひく台形様石器群が37.5ka cal BPまでに成立したことにより始まったことが既に明らかにされている。つまり両者の成果をあわせると、日本列島における後期旧石器文化とは、ユーラシアIUP石器群と台形様石器群という、出自と由来の異なる石器群が融合した姿と判明したのである（国武他2021b、国武他2022）。

そこで日本列島における後期旧石器文化の起源と成り立ちを解明するためには、この両者の石器群がどのようにして日本列島にもたらされたのか、その過程について具体的に検討する必要があると考えられる。小稿ではやや大雑把ではあるがその全体像を描き出すことを主たる目的とし、日本列島における後期旧石器文化の成立過程を究明するうえで今後追求すべき課題を、その全体像から明らかにしていきたい。

## Ⅱ　ユーラシアIUP石器群の系譜

天山－パミール地域を中心とする中央アジア西部とアルタイ山地を中心とする中央アジア東部、そしてモンゴル、トランスバイカル地域を中心とする北アジアに展開するIUP期の石器群の全体をユーラシアIUP石器群と定義している（国武他2022）。アルタイ山地からトランスバイカル地域において同質性が指摘されるアルタイIUP（佐藤2017a・b）と共通する石器群が、中央アジア西部にも確認されており、ウズベキスタンのオビ・ラフマート洞窟の石器群に代表させてオビ・ラフマティアンと呼ばれている（Кривошапкин2012）。オビ・ラフマート洞窟は下層から上層まで石器組成が大きく変化せず、類似した石器群が継続しているが、問題はその年代である。当初の調査では最下層が110ka cal BPとされ、最上層は後期旧石器時代初頭とされる40ka cal BPとされた（Сулейманов1972）。最近の再

調査でも同様の年代値が得られている一方で（Krivoshapkin2020）、最上層の炭酸カルシウムのウランシリーズ年代値が98ka cal BPであるから全層を中期旧石器時代前半期とする見解も出されている（Asmeron et al.2018）。しかしながら、タジキスタンのフッジ遺跡の筆者による2019年11月の発掘調査により、同様の石器組成と技術組成をもつIUP期の石器群を検出したため（国武他2020）、オビ・ラフマティアンがIUP期にまで継続したことは確実である。このため筆者は、アルタイIUPはオビ・ラフマティアンを背景に成立し、オビ・ラフマティアンの中央アジア東部におけるヴァリアントと評価している（国武他2022）。

それでは、既に110ka cal BPに中央アジア西部に発生していたオビ・ラフマティアンと同様の石器群が45ka cal BPに中央アジア東部に出現した背景には何が考えられるのであろうか。オビ・ラフマート洞窟の下層石器群は、いずれの見解においても110–90ka cal BP前後に想定されている。これに加えてオビ・ラフマティアンにみられる中期旧石器時代の石刃石器群が、レヴァントのタブン洞窟の層位的変遷の最古段階にみられる長狭ルヴァロワ石刃を特徴とするタブンD石器群に共通するとして、中期旧石器時代前半に想定される新人の早期拡散と証拠とする見解も示されている（西秋2018、Krivoshapkin ibid.）。つまり、60ka cal BPを遡る新人の早期拡散が南回りに限定されるものではなく、中央アジアにまでも及んでいた証拠として、オビ・ラフマティアンを位置づける仮説である。オビ・ラフマート洞窟から出土した現生人類と古代型新人のモザイク的な特徴をもつ頭蓋骨もその根拠のひとつとされている。

その一方で、アルタイIUPは現生人類が担ったと想定されている。そのため、ここに新人の後期拡散の影響が想定されるのではないだろうか（図1）。つまり、50ka cal BP以降にレヴァントを発したユーラシア北回りルートを拡散した新人集団による影響である。中央アジア西部にまで拡散した際に、既にその地域において、先行して早期拡散により展開

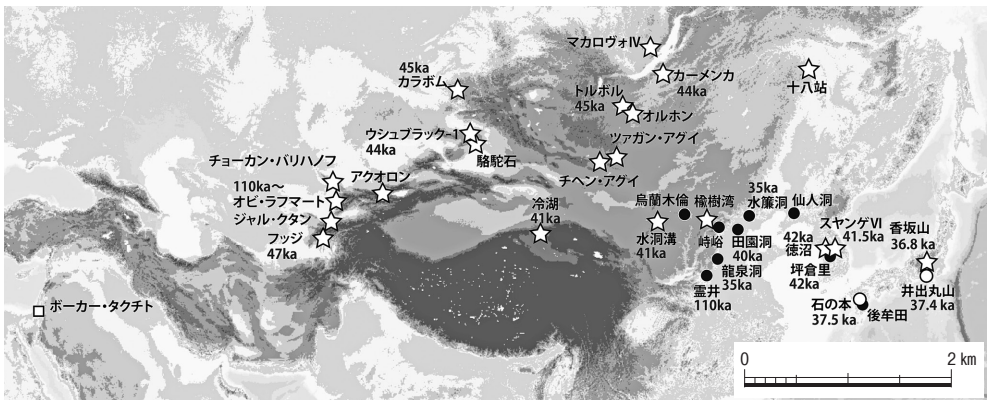



**図1**　主要遺跡分布（☆：ユーラシアIUP石器群の系譜、●：東アジア鋸歯縁石器群の系譜、○：台形様石器群　数字はcal BP）

していた新人により担われたオビ・ラフマティアンを受け継ぎ、中央アジア東部に至って、アルタイIUPとして発現したとする考え方である。中央アジア西部と東部の両地域ともにIUP期の遺跡は、標高1000～1,500mの比較的高い標高の山地で、フリントなどガラス質の石材ではなく、火成岩や堆積岩などやや粗粒の石材の大型でブロック状の原石が得やすい石材産地の近傍に立地する点で共通する（すべて香坂山遺跡にも共通し興味深い）。これは、石材を含む同様の生態適応の結果として、同様の立地環境に遺跡が残された結果なのではないだろうか。

つまり中期旧石器時代の中央アジア西部に発展していたオビ・ラフマティアンを、北回りルートで後期拡散により到来した新人集団が、生態適応の手段として自らの技術に取り込み、東方の地域に伝播させたのではないだろうか。ただしユーラシアIUP石器群は中央アジア西部と東部で、大型石刃生産技術にルヴァロワ技法を基盤とする程度に違いがあることや、尖頭器製作技術に明瞭な地域差が認められる（国武2021）。これはそれぞれの地域における中期旧石器文化の伝統が表出したためとみられることから、オビ・ラフマティアンの東方への拡散はおそらく、新人集団の移住に伴う侵入的な単純伝播だけでは説明できないであろう。そのメカニズムは現在不明であり、資料の実態をうまく説明できるモデルが必要となる。

中央アジアではかつてオビ・ラフマート洞窟の石刃石器群が中期から後期まで連続することを根拠に、人類の多地域進化説の根拠のひとつとされ、またヨーロッパの後期旧石器文化の起源地などとされてきた（Otto2017）。つまり石器からみた文化の連続性と遺伝情報に基づく人類拡散モデルを整合して説明できなかったわけであるが、上に示した仮説であれば、両立し得るのではないだろうか。

香坂山遺跡にみられた大型石刃生産、尖頭形剥片生産、小石刃生産は、ユーラシアIUP石器群にみられる基本的な石器組成であり、それぞれの技術組成も、細部に至るまでよく一致することが確認された（国武他2021b）。ただし年代が36.8ka cal BPであるため、ユーラシアIUP石器群が移住を伴う侵入的な単純伝播により、日本列島にもたらされたと断言するのはやや難しいと思われる。ユーラシアIUP石器群そのものか、その系譜を受け継ぎ石器組成と技術組成が大きく変化していない後期旧石器時代前期（EUP）石器群を、ユーラシア東部に想定するのが合理的であろう。具体的には、東アジア（中国北部から朝鮮半島）もしくは沿海州の山地帯に想定され、それが何らかの形で36.8ka cal BPまでに日本列島に伝播したとする考え方である。

その伝播経路については、ユーラシアIUP石器群そのものかその系譜をひいたEUP石器群が、東アジアに想定されるのであれば朝鮮半島経由となり、沿海州に想定されるのであればサハリン・北海道経由となるであろう。まず、ユーラシアIUP石器群そのものと捉え

ることができる中国寧夏回族自治区水洞溝遺跡第１段階（稲田1994、寧夏文物考古研究所・中国科学院古脊椎動物与古人類研究所2013）の年代が41.4–40.4ka cal BPとされているため（Li et al.2019）、北アジアよりは年代が下る41ka cal BPには東アジアの西部には入ってきていたことは確かである。また同様に、香坂山遺跡の36.8ka cal BPを遡る40ka cal BP前後の大型石刃石器群は、韓国でも報告されている。スヤンゲ遺跡Ⅵ地区４文化層（韓国先史文化研究院編2018）は41.5ka cal BPとされ、大型石刃素材の基部加工尖頭形石刃石器を組成することから、ユーラシアIUP石器からの何らかの影響を受けていると考えられる。しかし、中期旧石器的な様相がみられないと評価されていることから（佐藤2018）、ユーラシアIUP石器群の重要な技術的な要素が欠落していることになる。興味深いことにこれに僅かに遡る42ka cal BP前後の徳沼遺跡３地層や新華里遺跡（韓国文物研究院2012、蔚山発展研究院文化財センター2013）などでは、剥片尖頭器を含まない大型石刃石器群が検出されているとのことである（中川2020b）。これらの石器群には大型石刃生産以外に、小石刃生産や中期旧石器的な尖頭器生産など、ユーラシアIUP石器群に共通する構造がみられるのかどうかが、今後焦点になるではないだろうか。もっとも蔚山新華里遺跡には求心剥離技術による斜軸剥片を素材とした定義的な斜軸尖頭器が組成するようにみえる（蔚山発展研究院文化財センター前掲）。これは、後で見るように日本列島と共通してその傘下にあった東アジア型中期旧石器石器群の技術的発現と評価できるであろうか。もしそうであれば年代値及び石器組成と技術組成が香坂山遺跡と無理なくつながり、日本列島の石刃石器群の起源となるユーラシアIUP石器群の伝播経路を朝鮮半島と理解することができるであろう。一方で沿海州にはユーラシアIUP石器群の系譜をひく石器群は分布しないのであろうか。将来沿海州の山地帯にも相当する資料が出現する可能性も考慮しておきつつ、現在のところは暫定的に朝鮮半島が伝播経路であった可能性を考慮しておきたい。

## Ⅲ　台形様石器群の系譜

次に台形様石器群の系譜はどのように辿れるのであろうか。アジアの中期旧石器文化を汎ユーラシア的な視点から長く研究する佐藤宏之の所見を手掛かりに全体を位置付けるとともに、中国、韓国の研究成果のレビューを通じて東アジア全体を見通したい（図１）。すでに台形様石器群は求心剥離技術や素刃石器の連続性から、列島における中期旧石器時代の斜軸尖頭器石器群に技術的系統関係が求められることが明らかにされている（佐藤1992）。その斜軸尖頭器石器群は、日本列島においては中期旧石器時代後半に位置づけられる70–50ka cal BP頃に想定されている（佐藤2017b）。そして斜軸尖頭器石器群は、求心剥離技術を含む各種の調整石核からなるが、規格的なルヴァロワ方式は確認できない多様

な非ムステリアン石器群、つまり東アジア型中期旧石器石器群の一部に位置付けられている。東アジア型中期旧石器石器群では求心剥離技術による斜軸尖頭器が発達し、中国北部から西部を中心とする東ユーラシア北部が主たる分布域とされる。そして、近年は東南アジアやオーストラリアでも100ka cal BP以降に、この東アジア型中期旧石器石器群をもつ新人の存在が議論されているとのことである（佐藤2020）。これが意味するところは、120ka cal BP頃に想定されているムステリアンを保持した新人のユーラシア早期拡散により、上にみた中央アジアばかりでなく東南アジア方面にも、その系譜が広がっていたという想定である。そして南回りルートでは東進するにつれて変化していく自然環境にあわせてムステリアンの各種要素を脱落させていき、最終的に東アジア型中期旧石器石器群が形成されたとされる。日本列島に想定される斜軸尖頭器石器群もその流れのなかで理解され、朝鮮半島から流入したと考えられている（佐藤前掲）。その流入時期は、朝鮮半島との間に最後の陸橋が形成されたMIS 5（130–80ka cal BP）に想定され、これにより120～60ka cal BP頃に想定される列島における中期旧石器時代前半の遺跡が残されたとされている（佐藤2017b、長井2018）。

また、宮崎県後牟田遺跡第Ⅲ文化層（橘・佐藤・山田編2002）において指摘された九州の中期旧石器時代末から後期旧石器時代初頭にみられる鋸歯縁石器が卓越する石器群により、それらが中国や韓国の中期旧石器時代に既に同様の石器群が広く分布していたことから、朝鮮半島から流入し、九州のこの時期に特徴的に広がっていたことが明らかにされている（佐藤2002）。中国、韓国の鋸歯縁石器群は、東アジア型中期旧石器石器群の系譜にあるバラエティーのひとつとみられる。

さてその日本列島であるが、石の本遺跡（池田編1999）により37.5ka cal BPまでには列島内で台形様石器群が成立していたことが判明している。石の本遺跡とほぼ同じ年代値が得られている静岡県井出丸山遺跡についても、神津島産黒曜石が共伴することに加えて、明らかな遠隔地石材である下呂石も組成することも後期旧石器的な特徴を有している（中村2020）。そして石の本遺跡を含む九州の初期の台形様石器群にはとくに鋸歯縁石器が卓越する。これは中期旧石器時代末から後期旧石器時代初頭において、中国北部に発達した東アジア鋸歯縁石器群が九州に流入したことによる影響を想定できる。つまり九州における初期の台形様石器群には、東アジア型中期旧石器石器群の系譜をひく鋸歯縁石器群の影響が強くみられるのである（木崎2020）。そして九州において後期を遡る可能性のある石器群を、鋸歯縁石器群の範疇で理解可能であるのはこのためであろう。九州以外でも列島最初期の台形様石器群においてその後の時期よりも鋸歯縁石器が卓越する傾向があるのは、対象資源への機能的な理由に加えて、その影響が九州の外にもある程度広がっていたとみることができるであろうか。

ところで、この中国北部にみられる鋸歯縁石器が卓越する石器群では、古くは河南省霊井遺跡下層文化層（李他2007・2010・2016、Li et al.2019）など110ka cal BP以降に、鋸歯縁石器、ノッチ、削器を主体とする石器群が抽出されており（加藤2000）、中期旧石器時代を通じて発展したと評価されている。求心剥離石核から剥離されたとみられる斜軸剥片を素材として、やや鋸歯状の加工により尖頭部が作出された斜軸尖頭器を特徴的に組成する。またそれらの一部にはカンソン型尖頭器やタヤック型尖頭器などムスティエ文化の指標石器と類似する小型剥片尖頭器を含むことから、中期旧石器時代の時間的な位置づけとともに、中国北部において一体性をもつ中期旧石器時代石器群として把握されている。この鋸歯縁石器群グループ（加藤2019）にはいくつかのバリエーションが含まれるとされるが、後期旧石器時代にまで継続した点が中国北部における大きな特徴である。

ただし、中国北部における後期旧石器時代の鋸歯縁石器群は、点数は非常に少ないものの、後期旧石器的な要素が付加される例がみられるという（加藤2020）。小型・中型石刃、掻器、黒曜石製石器、磨製骨器がみられる35–28ka cal BPの河北省水簾洞第３層（張編2010、上峯他2019）、40–21ka cal BPの磨製骨器、装身具が伴う遼寧省小孤仙人洞第２層上部－３層（陳他2007）、35–31ka cal BPの石刃状剥片、磨製骨器が伴う河南省龍泉洞第２層（Du et al.2016）などである（加藤前掲）。

このような鋸歯縁石器群の変化の背景には、41.4–40.4ka cal BPの寧夏回族自治区水洞溝遺跡第１段階によるユーラシアIUP石器群の影響が想定されている。この石器群はその後中国北部においては定着しなかったとみられる。しかし、鋸歯縁石器群をもつ集団と同一地域に展開したことから、一時的であるにせよ両者は接触していたと考えるのが自然であり、ユーラシアIUP石器群からの影響関係の表れとして、石刃石器や掻器をはじめとする後期旧石器的な要素が鋸歯縁石器群に取り込まれたと考えられるのである。つまり中国北部においては、MIS５以降、中期旧石器時代から後期旧石器時代前期（EUP期）にかけて、鋸歯縁石器群が継続するものの、41ka cal BPにユーラシアIUP石器群が貫入して鋸歯縁石器群と接触し、それ以降に後期旧石器的な要素が少量加わるという変化が認められるということである（加藤前掲）。

朝鮮半島の後期旧石器時代には、剥片尖頭器石器群を遡る年代に、MIS３以前から継続する石英を主体とする石器群が確認されており、中期旧石器時代以来の技術伝統が継続する（中川2020a）。坪倉里遺跡（ソウル大学校考古美術史学科・京畿道博物館2000）はMIS５の同石器群と同様のノッチや削器などを特徴とする小型剥片石器であるが、後期旧石器的な特徴として掻器を組成するとのことである（中川前掲）。これらは中国北部の中期旧石器文化として発展した鋸歯縁石器群と同じ系譜に位置付けても大きな間違いはないであろう。中期から後期旧石器時代に継続して発展し、後期旧石器時代になると掻器という後期旧石

器的な石器が付加されるというのも似た構造にみえる。中期旧石器時代以来、中国北部と一体となって発展したのか否か、今後検討が必要となるであろう。

その場合、42ka cal BP前後に位置付けられるという徳沼遺跡などの朝鮮半島における大型石刃を含む石器群（中川2020b）との関係はどのようになるのであろうか。中国における両者の関係のごとく、別系統として接触しながら影響を与える関係となるのか、あるいは両者で一体の石器群となるのだろうか（中川前掲）。中国では鋸歯縁石器群が主体の中に、石刃石器群が侵入的に別系統として入ってきたと理解されているようだ（李他2016）。これは、日本列島において香坂山遺跡が出現した36.8ka cal BPの状況とも相似的でもある。つまり、先行して広がっていた列島の中期以来の系譜をひく台形様石器群が主体を占めるなかに、ユーラシアIUP石器群の系譜が忽然と姿を現す状況である。移住を伴う侵入的な伝播を想定することになるのだろうか。それとも、移住を伴わず文化的な情報が何らかの形で伝播したのであろうか。韓国の同様の例とあわせて、この状況は大局的に見れば東アジアにおけるEUP期もしくはそれを遡る時期における東アジア型中期旧石器石器群とユーラシアIUP石器群というモヴィウス・ラインを超えた２つの系譜の出会いとして、共通する現象である。その背景と両者の関係を読み解くことができれば、東アジアの後期旧石器文化の性格を評価するうえで非常に重要な構造が見えてくるであろう。この地域を一体として議論しなければ解決しない課題でもある。

ところで、列島最初期の台形様石器群に影響を与えた東アジア鋸歯縁石器群は、どのようにして日本列島に伝わったのであろうか。中国の中期旧石器時代の鋸歯縁石器群では、ともに110ka cal BP頃の河南省霊井遺跡下文化層と河北省侯家窯遺跡上文化層において、古代型新人の人骨が検出されている。霊井の頭蓋骨はデニソワ人の可能性が高いとされる（Gibbons2017、Gokhman et al.2019）。その一方で後期旧石器時代の鋸歯縁石器群には、42–39ka cal BPの周口店田園洞、35.1–33.1ka cal BPの周口店山頂洞、36.2ka cal BPの山西省峙峪遺跡で現生人類の人骨が検出されている（劉他2014、加藤前掲）。技術伝統を同じくする鋸歯縁石器群を、中期旧石器時代の110ka cal BP頃には古代型新人が、後期旧石器時代の40–33ka cal BP頃には現生人類が担っていたということになる。そして、田園洞人のゲノム分析によれば、ヒマラヤの南を拡散した東アジア集団と判明し、北回り拡散ルート上の古代北ユーラシア集団（を含む西ユーラシア集団）の遺伝情報は含まないという重要な結論が得られている（Yang et al.2017）。このため、後期旧石器時代における中国北部の鋸歯縁石器群の担い手は、南回り拡散ルートにより東南アジアに入った後に、中国南部から北上して中国北部に至った現生人類であったことを示している。南回り拡散集団が、東アジアを北上する過程で石器組成を変化させていき、それまで中国北部でデニソワ人あるいは古代型新人など異なる種の人類が担っていた鋸歯縁石器群を自らの適応手段として取り

込んだということになる。その新人集団が朝鮮半島を通じてMIS 4 から40ka cal BPに（長井2018）、少なくとも37.5ka cal BPまでには日本列島に到来したということになる。もっとも、南回り拡散ルートの年代は60ka cal BP以前に遡ることが指摘されているため（Bae et al. 2017）、MIS 5 以降の数度にわたる東アジア型中期旧石器石器群の列島への到来が（佐藤2017b、長井前掲）、それぞれ異なる新人集団によって担われた可能性を考えてもよいだろう。

主に中国北部において鋸歯縁石器群が中期から後期旧石器時代まで連続しているにもかかわらず、担い手の人類が入れ替わった現象を説明するためには、中国北部における人骨証拠からこのような仮説が考えられるであろう。

## Ⅳ　日本列島における後期旧石器文化の起源と成立過程

以上をまとめると日本列島における後期旧石器文化の起源と成立過程は以下のように説明される（図２）。まずユーラシア東部に発生した求心剥離技術を基盤とする斜軸尖頭器に特徴づけられる東アジア型中期旧石器石器群が、新人の早期拡散に伴い日本列島にMIS 5 の時期に朝鮮半島を通じて到来する。以降日本列島においては斜軸尖頭器石器群が中期旧石器時代を通じて継続する。一方で、同じく東アジア型中期旧石器石器群の一部である鋸歯縁石器群が110ka cal BP頃までに中国北部において発生する。その後、古代型新人によって担われていた東アジア鋸歯縁石器群の分布領域に、現生人類の後期拡散における南回り拡散集団が、東南アジアを経由して東アジアを北上することにより到達した。そして年代は40ka cal BPをどの程度まで遡るか不明であるが、40ka cal BPまでにはそれを自らの石器製作技術として取り込んだ。41ka cal BP頃にユーラシアIUP石器群からの影響を受けつつも、基本構造は変化させずに、中期旧石器時代末期に朝鮮半島を通じて列島に伝わり、九州に鋸歯縁石器群として特徴的に広がった。その一方で列島における中期の斜軸尖頭器石器群の系譜が変容し、また東アジア鋸歯縁石器群の影響も一部受けつつ、石の本遺跡をはじめとする台形様石器群が列島内で37.5ka cal BPまでに成立した。井出丸山遺跡にみられる明らかな遠隔地石材の利用から、行動論的にみても後期旧石器文化の開始は明らかである。これにより日本列島における後期旧石器時代が始まった。ただしこの段階では台形様石器群といっても一様ではなく、各地で台形様石器を含む多様な非石刃の小型～中型の剥片石器群が分立した状態にあった。

その一方で、レヴァントの中期旧石器時代前半の長狭ルヴァロワ石刃を特徴とするタブンＤ石器群を担った新人集団が、早期拡散により中央アジア西部に進出した。その表れとして中央アジア西部において110ka cal BPまでに成立していた大型石刃生産、尖頭器生産、

小石刃生産に特徴づけられるオビ・ラフマティアンから、アルタイIUPに代表される大型石刃を特徴としたユーラシアIUP石器群が連続的に形成された。これは遅くとも46ka cal BP前後までには成立している。

これを新人の後期拡散のうち北回り拡散集団が担うことにより、中央アジア東部および北アジアにおいてアルタイIUPとして展開した。東アジアには中国水洞溝遺跡や韓国の事例から41ka cal BPには、この系譜が入ってきていたことを確認できる。そしてこのユーラシアIUP石器群の系譜を引くEUP石器群が36.8ka cal BPまでに、おそらく朝鮮半島を通じて列島に伝わり、香坂山遺跡が残された。ユーラシアIUP石器群の系譜は中央アジア西部の中期のオビ・ラフマティアン以降、列島のEUP期の香坂山遺跡に至るまで斉一的で均質な技術構造を保持していた。

台形様石器群の成立に少し遅れて列島に到達したユーラシアIUP石器群の系譜の流入が契機となり、列島内にて各地で分立状態にあった初期の石器群構造の再編成が始まったとみられる（国武他2022）。つまり両系譜に由来する２つの石器群は日本列島内部において接触し、おそらく互いに影響関係を及ぼしながら変容していったとみられ、武蔵台遺跡にみ

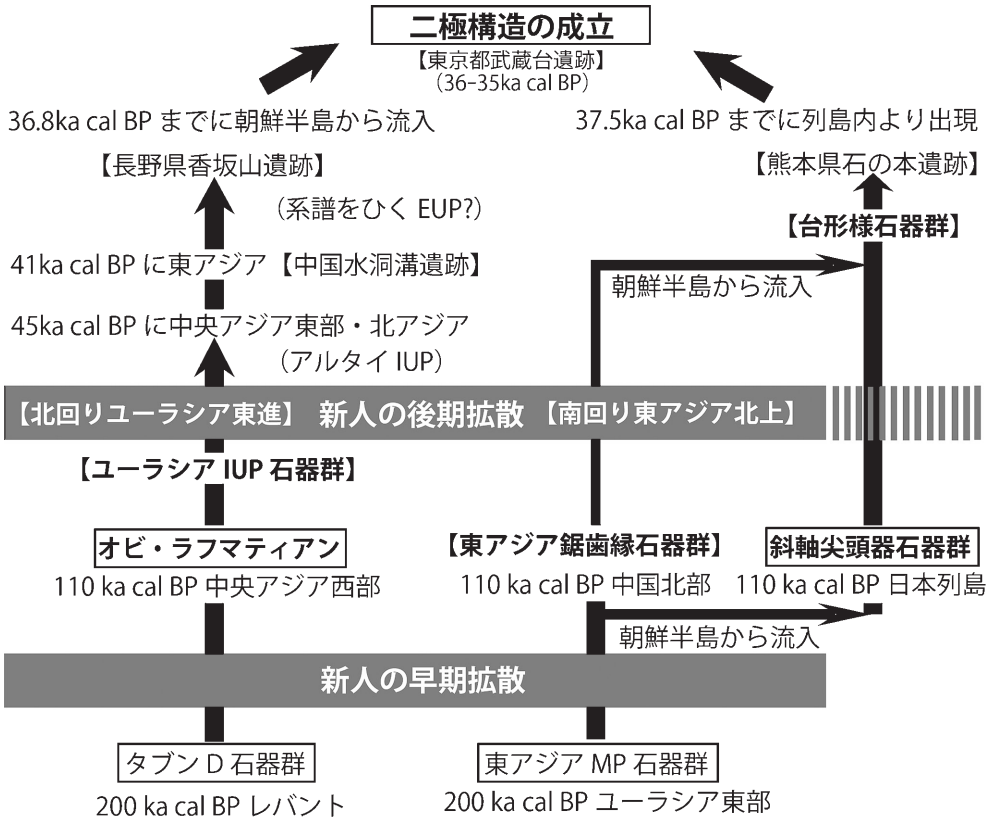



**図２**　日本列島後期旧石器文化の起源と成立過程

える35.3ka cal BPまでには両者を基盤とする石器群が日本列島において形成されたことが確認できる。まさにこの融合の過程が構造変動（佐藤1992）の実態であった（国武他2022）。そして両系譜の石器群が融合あるいは一体化して二極構造という均質な石器群構造が成立した現象をもって、日本列島における後期旧石器文化の成立とみなすことができるであろう。大局的には以上のような変化の方向性がみられたが、当然のことながら、両者の融合の過程は地域によって異なっていた。特に石刃については、生態的な有効性が地域によって異なったことに起因して、それが卓越する時期が地域によって大きく異なることになった。

また、東アジア型中期旧石器石器群の系譜がユーラシアIUP石器群の系譜に先行して日本列島に到来したのは、まずその起源地がユーラシア東部であり中央アジア西部と比べてはるかに日本列島に近かったためと、それを担った南回り拡散ルートの年代が北回りよりも先行していたためであろう。両系譜が年代差をもって出現し、同一領域に一時的に共存した現象は中国北部や朝鮮半島にも認められる可能性があり、この点から東アジア全体に共通した現象であったと想定できる。

このように日本列島における後期旧石器文化の起源と成立には、MIS 5 の110ka cal BP頃にみられるオビ・ラフマティアンと東アジア型中期旧石器石器群という、ユーラシア大陸の２つの中期旧石器文化の他地域への伝播がカギになるとみられる。これまで旧石器考古学からみた中期から後期旧石器時代への連続性はユーラシアの各地域で確認されていたが、その一方で遺伝人類学からみた新人の後期拡散による人類交代はそれと一見矛盾する現象であり、両者が成り立つ合理的かつ統一的な説明はなかなか難しい。しかしながら、これらの文化が列島まで到達した原動力として、２つの中期旧石器文化の領域に到達した南北それぞれの新人の後期拡散を想定する点（図２）、これが小稿で問いたい仮説である。

## Ⅴ　おわりに

小稿では日本旧石器文化の起源と成立過程という、おそらく日本旧石器研究にとって最も根源的な課題への答案について、粗くとも全体像を描き出すことを目的とした。その過程で未解決の課題が数多く存在することをあらためて確認した。今後このテーマについては、アジアの中期旧石器文化研究の進展にともなって、急速な発展が見込まれる。小稿に示した仮説は、常に最新のデータを背景にしつつ修正を重ねていく必要があると考えている。

**謝　辞**

執筆にあたり東京大学の佐藤宏之氏にはアジアの中期旧石器文化についてご教示いただくとともに的確なご指摘をいただいた。あわせて日本旧石器文化をユーラシアの先史世界に位置づける視点をいただいた。東京大学総合研究博物館の西秋良宏氏によるパレオアジア文化史学プロジェクトの議論からは先史社会を究明する複合的な視点をいただいた。奈良文化財研究所の加藤真二氏には中国旧石器の関連文献をすべて提供いただいた。明治大学黒耀石研究センターの堤隆氏および須藤隆司氏とともに2020年に発掘した香坂山遺跡の調査成果を、ユーラシア旧石器研究に位置づける試みが執筆の契機となった。深く感謝申し上げるとともに事実に誤りがあるところはすべて筆者の責に帰すことはいうまでもない。

小稿は2021年１月に脱稿したため刊行時点の所見と若干異なる箇所もあるが、仮説の全体構想は現在も維持し得ると考えているため、当時の所見を修正せずにあえて残した。

**参考文献**

Asmeron Y., Polyak. V.J., Wagner J.D.M., Patchett P.J. 2018 'Hominin expansion into Central Asia during the last interglacial' *Earth and Planetary Science Letters* 494 148-152

Bae C., Katerina Douka K., Petraglia M. 2017 'On the origin of modern humans: Asian perspectives' *Science* vol.358 DOI: 10.1126/science.aai9067

Du, S., X. Li, L. Zhou, H. Pang, O. Bar-Yosef, and X. Wu (2016) Longquan Cave: An early Upper Palaeolithic site in Henan Province, China. *Antiquity*, 90 (352) 876-893

Gibbons A. 2017 'Ancient skulls may belong to elusive humans called Denisovans' *Science* vol.355 doi:10.1126/science.aal0846

Gokhman D., Mishol N., Manuel M., Juan D., Shuqrun J., Meshorer E., MarquesBonet T., Rak Y., Carmel L., 2019 'Reconstructing Denisovan Anatomy Using DNA Methylation Maps' *Cell* 179 180-192

池谷信之編　2011『沼津市文化財調査報告書100　井出丸山遺跡発掘調査報告書』 沼津、沼津市教育委員会　p.120

池田朋生編　1999『熊本県文化財調査報告第178集　石の本遺跡群Ⅱ　第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』 熊本、熊本県教育委員会　p.226

稲田孝司　1994「水洞溝技法とルヴァロワ技法―東アジア石刃技法形成の一過程―」『考古学研究』第41巻第１号　考古学研究会　pp.25-46

韓国文物研究院　2012『彦陽新華里遺跡』 ソウル

韓国先史文化研究院編　2018『丹陽垂楊介舊石器遺蹟（Ⅰ・Ⅵ地区)』

加藤真二　2000『中国北部の旧石器文化』 東京、同成社　p .286

加藤真二　2019「中国の旧石器―その石器群類型と編年―」『旧石器研究』第15号　日本旧石器学会　pp.91-106

加藤真二　2020「いくつかの事例からみる中国北部における後期旧石器の開始について」『アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築４』西秋良宏編　pp.23-30

木崎康弘　2020「中期から後期へ―九州地域の様相変遷―」『九州旧石器』第24号　pp. 1 -16

Кривошапкин А.И. 2012 'Оби-Рахматский вариант перехода от среднего к верхнему палеолиту в центральной Азии *АВТОРЕФЕРАТ диссертации на соискание ученой степени доктора исторических наук* ИАЭТ СО РАН 1-39

Krivoshapkin A. I. 2020 'Obirakhmatian blade MP tradition in western Tien Shan: evidence of Mysliya/Hayonim people expansion into Central Asia?' *Tracking unknown routs*: *early migration to Asia?* Institute of Archaeology and Ethnography SB RAS and Lomonosov Moscow State University (Online Seminar on 03 July 2020)

国武貞克　2021「中央アジア西部における初期後期旧石器時代（IUP期）石器群の追求と日本列島到来の可能性」『アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築パレオアジア文化史学　A01班2020年度研究報告』5　西秋良宏編　pp.11-20

国武貞克編　2020『奈良文化財研究所研究報告第25集　タジキスタン中期旧石器文化の研究―ユーラシア考古学資料２―』　奈良、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　p.120

国武貞克編　2021『中央アジア旧石器研究報告第７冊　香坂山遺跡2020年発掘調査成果報告書』奈良、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　p.205

国武貞克・フジャゲルリディエフ トゥーラ・佐藤宏之　2020「タジキスタン南部ザラフシャン山脈南麓のフッジ遺跡発掘調査速報」『第21回北アジア調査研究報告会』　同会　pp. 5－8

国武貞克・須藤隆司・堤隆　2021a「日本列島最古の石刃石器群の構成とその起源」『旧石器研究』17号　日本旧石器学会　pp.125-146

国武貞克・須藤隆司・堤隆・國木田大・佐藤宏之　2021b「長野県佐久市香坂山遺跡の発掘調査―日本列島における石刃石器群の起源をめぐる調査研究―」『日本考古学協会第87回総会研究発表要旨』　一般社団法人日本考古学協会　p.30

国武貞克・國木田大・佐藤宏之　2022「石刃石器群の起源からみた日本列島における後期旧石器文化の成立」『考古学研究』69-２　考古学研究会　pp.56-73

李占扬　2007「许昌灵井旧石器时代遗址 2005 年出土石制品的初步研究」『人类学学报』26（２）pp.138-154

李占扬　2010「许昌灵井旧石器时代遗址2006年发掘报告」『考古学报』１　pp.73-100

李占扬・赵清坡・李雅楠　2016「灵井许昌人遗址2014年发掘简报」『华夏考古』１　pp.3-25

Li H., Li Z., Gao X., Kuman K., Sumner A. 2019 'Technological behavior of the early Late Pleistocene archaic humans at Lingjing (Xuchang, China)' *Archaeological and Anthropological Sciences* vol.11 3477-3490

Li, F., S. L. Kuhn, O. Bar-Yosef, F. Chen, and F. Peng 2019 'History, chronology and techno-typology of the Upper Paleolithic sequence in the Shuidonggou area, northern China' *Journal of World Prehistory* 32 111-141

劉武・呉秀傑・邢松・張銀運　2014『中国古人類化石』　北京、科学出版社

李锋・陈福友・汪英华・高星　2016「晚更新世晚期中国北方石叶技术所反映的 技术扩散与人群迁移」『中国科学　地球科学』第46卷第７期　pp.891-905

長井謙治　2018「朝鮮半島ルートでみた日本列島への人類到達仮説」『旧石器研究』第14号　日本旧石器学会　pp.65-90

中川和哉　2020a「朝鮮半島南部におけるMIS３の石器群」『アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築４』西秋良宏編　pp.73-77

中川和哉　2020b「韓国における後期旧石器時代前半の石器製作技術」『第10回研究大会　パレ

オアジア文化史学―アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』北川浩之編　pp.52-53（オンライン2020年12月20日）
中村雄紀　2020「第３章　愛鷹第１期の石器編年」『愛鷹山麓の旧石器文化』池谷信之・佐藤宏之編　東京、敬文舎　pp.109-151
寧夏文物考古研究所・中国科学院古脊椎動物与古人類研究所　2013『水洞溝：2003-2007年度考古発掘　与研究報告』　北京、科学出版社
西秋良宏　2018「レヴァント地方前期ムステリアンの諸問題」『パレオアジア第５回研究大会予稿集』藤木利之・北川浩之編　pp.54-55
Otto M. 2017 'Obi-Rahmat (Ouzbékistan), origine du Gravettien en Europe, et du métissage néandertalien' *L'Anthropologie* vol.121 (4) 271-287
中国社会科学院考古研究所・山西省考古研究所　2016『下川：旧石器時代晩期文化遺址発掘報告』　北京、科学出版社
佐藤宏之　1992『日本旧石器文化の構造と進化』東京、柏書房　p.362
佐藤宏之　2002「後牟田遺跡第Ⅲ文化層の編年的意義と行動論」橘昌信・佐藤宏之・山田哲編『後牟田遺跡』橘・佐藤・山田編　宮崎、後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会　pp.382-395
佐藤宏之　2005「日本列島の自然史と人類」『日本の地誌　第一巻　日本総論Ⅰ（自然編）』　東京、朝倉書店　pp.80-94
佐藤宏之　2017a「現生人類アジア拡散研究の現状：IUP・細石刃技術・礫器剥片石器群」『第18回　北アジア調査研究報告会』同会　pp.11-14
佐藤宏之　2017b「日本列島の中期／後期旧石器時代移行期に関する再検討」『ラーフィーダン』第XXXⅧ巻　国士舘大学　pp.55-60
佐藤宏之　2018「現生人類のアジア拡散研究から見たスヤンゲ遺跡第６地点第３・４文化層の位置づけについて」『丹陽垂楊介舊石器遺蹟（Ⅰ・Ⅵ地区）―自然科学分析―』　ソウル、韓国先史文化研究院　pp.213-232
佐藤宏之　2020「第九章　東アジア旧石器社会の歴史的変遷と愛鷹旧石器文化の意義」『愛鷹山麓の旧石器文化』池谷信之・佐藤宏之編　東京、敬文舎　pp.343-378
ソウル大学校考古美術史学科・京畿道博物館　2000『龍仁坪倉里旧石器遺跡発掘調査報告書』
Сулейманов Р. Х. 1972 *Статистическое изучение культуры грота Оби-Рахмат* АН УзССР. Институт Археологии 171С Ташкент
須藤隆司編　1999『佐久市埋蔵文化財調査報告書第75集　ガラス質黒色安山岩原産地遺跡群　八風山遺跡群　長野県佐久市大字香坂八風山遺跡群発掘調査報告書』　佐久、交栄興産株式会社・佐久市教育委員会　p.619
谷　和隆編　2001『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書29―佐久市内―香坂山遺跡』　長野、日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター　p.72
橘昌信・佐藤宏之・山田哲編　2002『後牟田遺跡　宮崎県河南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』　宮崎、後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会　p.456
陳全家・趙海龍・王法崗　2007「吉林樺甸仙人洞旧石器遺址1993年発掘報告」『人類学学報』26（３）　pp.223-236
上峯篤史・王法崗・渡邊貴亮・麻柄一志・髙木康裕・菊地大樹・覺張隆史（2019）「中国北部における後期更新世石器群の変化：内モンゴル薩拉烏蘇遺跡と河北省水簾洞遺跡の分析から」『アジアにおける ホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築３』西秋良宏編

pp.82–96
蔚山発展研究院文化財センター2013『蔚山新華里遺跡』ソウル　p.269
Yang M.,, Gao X., Theunert C., Tong H., Aximu-Petri A., Nickel B., Slatkin M, Meyer M., Pääbo S., Kelso J., Fu Q. 2017a '40,000-Year-Old Individual from Asia Provides Insight into Early Population Structure in Eurasia' *Current Biology* 27（20）3202–3208
張献中編　2010『水簾洞揭秘：探訪汐汐水石家荘先民之家』　石家庄、河北美術出版社　p.236

**挿図出典**

図１：筆者作成
図２：筆者作成（仮説の概念図であるため、今後修正を重ねる予定）